

前橋市立図書館コレクション展

2025 後期

会期 令和8年1月14日（水）～4月5日（日）

会場 図書館本館 2階展示室

前橋市立図書館

(群馬県前橋市大手町二丁目 12-9 / 027-224-4311)

第1章 怪談と伝説

1. 小泉八雲の怪談

| 作品リスト No.1 |

ギリシャ西部のレフカダ島で生まれた小泉八雲は、雑誌の通信員として来日し、明治23(1890)年に日本へ移り住みます。その後、明治37(1904)年に『怪談』を執筆しました。これは、妻の小泉節子などから聞いた日本の伝説や古典文学を、八雲らしい文章で書き直して文芸作品にしたもので、耳なし芳一の話や雪女などが収録されています。

【伝説とは】

伝説とは、口承文芸^{※1}のひとつで、古くから語り伝えられてきた言い伝えのことです。日本での口承文芸の始まりは、文字が発達するよりも前だと考えられており、わらべうたや民謡、伝説などを語り伝える行為は、主に庶民の間で広まっていきました。文字の発達や時代の変化、地域差などで様々な変化を遂げた口承文芸は、現在でも都市伝説がインターネットで世界に広まるなど、社会状況とともに形態も変化し続けています。

伝説の特徴として、歴史上の人物や特定の地域に関する事項など、具体的な人物や場所と結び付けて語られることが多く、創作性の高いジャンルである昔話よりも信憑性を重んじるという点があります。さらに、口伝えて語られるため、地域や時代、語り手によって様々に変化するという点も大きな特徴です。

※1 口承文芸：文字を使わずに口伝えて伝承される文芸のこと。

2. 皿屋敷伝説

| 作品リスト No.2-4 |

日本で有名な怪談といえば、日本三大怪談と呼ばれる「四谷怪談」「皿屋敷」「牡丹灯籠」の3つです。ここでは、そのうちの一つ「皿屋敷」に注目します。

現在よく知られている皿屋敷伝説は、江戸が舞台の「番町皿屋敷」と、兵庫県が舞台の「播州皿屋敷」が挙げられます。もともと皿屋敷伝説はうわさ話として広まっていたため、特徴や性質が似ている話が全国各地に伝わっています。この話の発祥は播州であるといわれており、天正5(1577)年に

ながらちくそう
播州の永良竹叟という人物が記した『竹叟夜話』が、皿屋敷伝説を記した資料で最も古いとされています。また、17世紀後半の江戸番町でも皿屋敷伝説のうわさ話は広まっていました。

展示している『泰平御江戸絵図』には、「番町皿屋敷」の舞台となった江戸の番町が見られます。「番町皿屋敷」は、劇作家の岡本綺堂が作成した歌舞伎の演目の一で、大正5(1916)年に東京の本郷座にて初演が行われました。こちらは、旗本・青山播磨を慕う侍女・お菊が、青山の心を確かめるために秘伝の皿を1枚割ってしまったため、手討ちにされて井戸に投げ込まれますが、青山の本心を知ることができたお菊は満足して死んでいくというストーリーです。このストーリーは様々な皿屋敷伝説を集めて歌舞伎の演目としてアレンジしたもので、主人と侍女の恋愛が大きなテーマとなっています。これ以前に人形浄瑠璃などで上演されていた皿屋敷伝説は、お家騒動の要素が含まれていました。

17世紀後半に江戸番町で広まっていた皿屋敷伝説は、誤って主人の皿を1枚割ってしまったお菊が井戸に身投げをし、夜になると井戸から悲しい泣き声のような音が流れるという内容です。さらに、18世紀末には、江戸番町をはじめとした全国各地で、お菊の年忌ごとにアゲハチョウが異常発生するという事象が起り、そのサナギが後ろ手に縛られた人のように見えることから、お菊虫と呼ばれるようになりました。現在でも、姫路城にはお菊が投げ込まれて以来皿を数える声が聞こえてきたというお菊井戸、東京都千代田区にはお菊が帶を引きずりながら通ったといわれている帯坂^{※2}などが残り、その伝説が伝え続けられています。

※2 帯坂：「東海道四谷怪談」のお岩が通ったという説もある。

【群馬に残るお菊伝説】

群馬県では、甘楽町付近で中世以降勢力をもっていた小幡氏の一族にお菊伝説が伝わっています。このお菊伝説は、主人に寵愛されていたことを他の侍女に妬まれ、殺されてしまった女性の話です。主人の飯に針を入れた罪を着せられたお菊は、ヘビやムカデが入っている樽に入れられて、池に沈められました。その後、小幡氏を祟るという内容です。お菊が沈められた池は、甘楽町にある宝積寺の奥に位置する菊ヶ池であるといわれており、宝積寺にはお菊の墓と菊女観音が設置されています。この伝説は現在、甘楽町、妙義町、藤岡市日野地区付近に残っています。

3. 谷隠し伝説

| 作品リスト No.5-8 |

群馬県の特徴の一つとして、山地が多いことが挙げられます。ここでは、山地にまつわる伝説の中でも弘法大師と関わりの深い、谷隠しの伝説についてご紹介します。

谷隠しの伝説は、弘法大師が靈場にできる場所を探しに^{※3}来訪したが、そこを靈場にされると困る天狗やアマノジャクが一谷隠してしまうため九十九谷しか見つからず、弘法大師は諦めてしまったという内容です。この伝説は、袈裟丸山^{※4}や榛名の天狗山、板倉町の海老瀬など、県内の各地に伝わっています。

また、赤城山にも谷隠しに似た伝説が伝わっています。こちらは、赤城山が靈場になるためにはあと一谷足りなかつたため、赤城の神が日光の二荒に取りに行ったところ、二荒の神と喧嘩になってしまったという内容です。赤城の神と二荒の神の戦いにはいくつか種類があり、このほかには中禅寺湖を巡って神々が争った場所が戦場ヶ原であるという話や、争いの際に赤城の神はムカデ、二荒の神はヘビとなって戦ったという話などが広く伝わっています。この二神の伝説は、14世紀後半に成立したとされる説話集である『神道集』にはすでに収録されており、地域に根差した信仰や民俗の伝説として古くから伝えられてきたようです。

※3 弘法大師が靈場にできる場所を探しに：高野山に次ぐ第二の靈場を探しに来たと伝わるところもある。

※4 袈裟丸山：みどり市、沼田市、栃木県日光市にまたがる山。

第2章 昔の辞書あれこれ

1. 江戸時代の三大辞書

| 作品リスト No.9-11 |

【倭訓栞】

全 93 卷 82 冊におよぶ大規模な国語辞書で、前編・中編・後編にわかれ、安永 6 (1777) 年から明治 20(1887) 年にかけて刊行されました。古語・雅語・俗語・方言・外来語（オランダ語・ポルトガル語等）といった幅広く豊富な約 20,000 の語を、五十音順に配列しています。江戸時代の辞書はいろは順が主流であり、五十音順配列は珍しい構成でした。また、語釈（語句の意味の説明）・出典・用例を示し、現在の国語辞書のような体裁をとった初めての辞書として評価されています。

『倭訓栞』は江戸時代にオランダに伝えられて、日本語を知るための参考書として使用されたといわれています。編者の谷川士清たにがわことすがは江戸中期の国学者で、宝永 6 (1709) 年に伊勢国（現在の三重県）の町医の家系に生まれました。医業のかたわら国学の研究にはげみ、宝暦元 (1751) 年には『日本書紀通訳』（全 35 卷）を成立させています。これは、『日本書紀』全体に注釈をつけた最初の本でした。

『倭訓栞』は谷川の没した翌年から、100 年以上の歳月を要して刊行されました。現在普及しているのは、明治 30 年代に井上頼匱・小杉権輔が増補改訂して活字化した『増補語林倭訓栞』（全 3 卷）ですが、これには後編の内容は収録されていません。

【俚言集覽】

全 26 卷、江戸時代の口語（日常語）集ともいえる俗語辞書です。正確な成立年はわかつていませんが、寛政 9 (1797) 年から編者が没する文政 12 (1829) 年の間と考えられています。俗語（口語）・ことわざ・方言を中心に、古語・漢語・仏教語などを収録し、凡例によると江戸語（江戸の住民が使用した語）を多く採用したことが記されています。配列は特殊で、五十音横列順（あかさたな順）となっています。編者の太田全斎おおたぜんさいは、以前に『諺苑』げんえんという俗諺（世間で使われることわざ）集を編さんしており、『俚言集覽』はこれを発展させた資料といわれています。写本のまま伝えられていましたが、明治 32 (1899) 年より井上頼匱・近藤瓶城みかきにより『増補俚言集覽』（全 3 冊）として活字化されました。その際、改編が行われ、語の配列は五十音順（あいうえお順）に変更されました。

太田全斎は宝暦 9 (1759) 年に生まれ、備後福山（現在の広島県）の藩士で、音韻学者でした。主な著作に『漢呉音図』かんごおんずがあり、これは『韻鏡』いんきょう（中国の音韻図。作者・成立年とも不詳だが、唐末から五代十国頃とされる）の注釈書です。

がげん しゅうらん
【雅言※5 集覽】

全 50 卷の、古語用例集ともいえる国語辞書です。配列はいろは順で、文政 9(1826)年から嘉永 2(1849)年にかけて「な」の項まで刊行されましたが、「ら」以降は写本で伝えられました。平安時代の文学作品を中心に、古典や漢籍等幅広い範囲から語句の用例を集め、一部の語句にのみ意味の説明を簡単に付けています。現在の国語辞書のように言葉の意味を説明するのではなく、和歌や文章を作るための用例・出典の参照を目的として編さんされました。明治以後の国語辞書の多くは、語句の用例にこの『雅言集覽』を出典としたものを採用していく、現在でも古語研究に有効な資料となっています。明治 20(1887)年、中島廣足によって『増補雅言集覽』(全 3 冊) が刊行され、一般に広まっています。

いしかわまさもち
編者の石川雅望は江戸後期の国学者兼狂歌師で、宝暦 3(1753)年に浮世絵師・石川豊信の子として江戸に生まれました。家業は旅籠屋であり、「宿屋飯盛」^{やどやのめしもり}という筆名で狂歌四天王の一人ともいわれていました。

※5 雅言：正しくよいことば。優美なことば。洗練されたことば。特に中古の和歌や仮名文などに用いられることが。雅語。(『日本国語大辞典』)

2. 明治・大正の国語辞書

| 作品リスト No.12-13 |

げんかい
【言海】

日本で最初の近代的な国語辞書として評価されている辞書で、明治 22(1889)年から同 24(1891)年にかけて第 1 版が刊行されました。収録語は 39,000 語をこえ、それらを五十音順に配列、一部に古語をふくむものの、普通語（現在一般に使用する語）の辞書として作成されました。規模感や編集方法などはアメリカの辞書を参考にしており、各語に発音・品詞・語源・語釈・出典を記述しています。400 回以上も版を重ね、明治・大正・昭和と長きにわたって広く利用された辞書でした。

編者の大槻文彦は、明治 8(1875)年に文部省の命でこの『言海』の作成を開始しましたが、出版は大槻の自費で行われました。その後、明治 45(1912)年頃より増訂に着手するものの完成を見る前に没し、大槻の協力者であった大久保初男らが事業を引き継ぎ、昭和 7(1932)年から同 10(1935)年にかけて『大言海』を刊行しました。これは現在でも販売されています。

だいにほんこくごじてん
【大日本国語辞典】

初版は本編4冊構成、大正4(1915)年から同8(1919)年にかけて刊行された大規模な国語辞書です。古代から大正時代に至るまでの普通語・学術用語・外来語など約200,000語を、歴史的仮名遣いの五十音順に配列しています。易しい語釈に加えて豊富な用例とその出典を示し、一部には図版も掲載されています。すぐれた国語辞書として『大言海』とともに評価されており、増訂版である『日本国語大辞典』(昭和47~51年初版刊行。全20巻)は、現在でも日本で最も大規模かつ代表的な国語辞典として広く利用されています。

かずとし かんじ
上田万年と松井簡治による共著とされていますが、実際には松井がほぼ一人で完成させたといわれており、『日本国語大辞典』への改訂作業も松井の孫により行われました。

3. 近代日本の様々な辞書

| 作品リスト No.14-16 |

にほんしゃかいじい
【日本社会事彙】

明治時代の百科事典で、日本で初めて西欧の百科事典の形式を取り入れて編集された辞書といわれています。初版は、明治23(1890)年に上巻、明治24(1891)年に下巻が刊行されました。日本の古代から近代に至るまでの事物・制度・風俗など15,000余りを項目に取り上げて五十音順に配列しています。さらに各事物の起源や沿革を、原典を明らかにしながら、時に図表・イラスト・写真などを付して解説しています。

たぐちうきち
編者の田口卯吉は経済学者でありながら、歴史家や政治家など様々な顔を持つ人物で、『日本社会事彙』は田口が創立した経済雑誌社から刊行されました。この辞書の前には『泰西政事類典』『大日本人名辞書』といった辞書を編集しています。田口はこのほか、『日本開化小史』(古代~江戸時代までの日本の歴史を記した書)の執筆や『国史大系』『群書類従』といった叢書(様々な資料を集めて一つのシリーズとして再出版したもの)の編さん刊行など、数々の出版事業に携わっています。また、明治20(1887)年に設立された両毛鉄道^{※6}の初代社長にも就任しています。

※6 両毛鉄道：現在のJR両毛線。両毛地域の生糸や織物を、京浜地方に輸送する目的で建設され、小山一前橋間の工事は、明治22(1889)年11月20日に完成し開業した。明治39(1906)年11月に国有化され、小山一高崎間が両毛線と呼ばれるようになった。

だいにほんちめいじしょ
【大日本地名辞書】

明治時代の地名事典ですが、その内容は、地域ごとに自然・社会・文化等の特色を記した地誌です。歴史地理学者の吉田東伍により、初版全 11 冊が明治 33(1900)年から同 40(1907)年にかけて刊行されました。日本全国の地名の由来・地形・史跡などのほか、関係する山川・社寺・産業・教育・民俗・芸能等の起源や沿革などを解説しています。続編が明治 42(1909)年に出版されますが、これには北海道・樺太・台湾・琉球といった戦前の日本領を含む地域が収録されました。各項目は歴史書のほか、多岐にわたる資料を駆使して詳細に記述されています。なお、冒頭には大隈重信・原敬・渋沢栄一ら政財界の著名人から寄せられた序文が多数掲載されています。

吉田東伍は独学で歴史地理を学ぶとともに、読売新聞記者として日清戦争に従軍。この頃から地名の変遷の研究を志したといわれています。『大日本地名辞書』の完成が評価され、明治 42(1909)年に文学博士になりました。

いんごしうらん
【隠語輯覽】

隠語辞書。大正 4 (1915)年、当時の京都府警察部保安課長・富田愛次郎の監修により、非売品として刊行されました。京都で大正天皇即位の御大典が挙行されるにあたり、その警備上の必要から作成され、内容は「犯罪常習者又ハ在監ノ囚徒間ニ使用セラルト隠語暗号」を収集したものとなっています。約 6,300 語を、天文・人物・建物・器具等ジャンルごとに分類し、その中で五十音順に配列しています。また、「特殊隠語」として朝鮮や台湾などで使用される俗語や隠語、「暗号」として犯罪者が相互の意思疎通に用いるジェスチャーやサインなども紹介しています。

第3章 日本の伝統芸能と群馬のうた

1. 能

| 作品リスト No.17-20 |

能は歌と舞踊を中心とする演劇で、狂言とともに「能楽」と呼ばれることもあり、現代まで演じ継がれています。南北朝時代から室町時代にかけて発達したとされており、猿樂と呼ばれる物まねや笑いの芸能から発展し、猿樂座の太夫であった観阿弥とその長男の世阿弥がその様式を確立させ、日本の文化に新たなジャンルを打ち立てました。観阿弥は室町時代に歌や踊りの入る短い劇になっていました猿樂に、曲舞と呼ばれる音楽に合わせて舞う技法や、民間芸能の要素である田楽などを取り入れて能を完成させました。観阿弥と世阿弥は足利義満に認められて以降、京都や奈良で広く有名になりました、座名を観世座と称し、親子で絶大な人気を得ました。また、豊臣秀吉は能好きとして知られており、自らも舞台に立ったといわれています。それ以降、能は代々將軍に保護されて発展し、大和国を中心に活動していた観世、宝生、金春、金剛の四座と江戸時代に加わった喜多の五流派が現在まで続いている。

能は能舞台と呼ばれる舞台で演じられ、主役であるシテ、脇役としてシテの演技を引き出すワキが登場します。シテは役に応じた面を付けることが多く、ワキは人間の男性で面はつけません。ワキの他にツレやトモと呼ばれる脇役が登場することもあります。

世阿弥は緊密で優雅な能を作ったとされ、代表的な作品である「高砂」は夫婦愛と長寿、世の太平を祝う大変めでたい能として現在でも上演され続けています。その他「井筒」「老松」「敦盛」など多くの作品を残しました。

【謡本】

謡本は能の楽譜のようなもので、詞章を掲げ、その右側に旋律や拍子を指示する符号などが記されており、江戸時代初期まで「謡の本」と呼ばれていました。現存最古の謡本は応永21(1414)年以降に書かれた世阿弥自筆能本といわれています。謡が流行した室町時代末期には、テキストとしての謡本が多く書写されるようになりました、フシの部分にゴマ点をつけ、それに「ハル」「下」などの文字が転記されて詳細になりました。江戸時代までの謡本はこの形式が継承されました。大まかな記譜法だったため細部の旋律などはわからず、個々に朱筆で補助符号を補って実用できるものにしていました。その作業や朱符号を直シといい、明治中期以降はこの直シを始めから印刷して、見てすぐ謡える詳しい謡本の様式が主流となっていきます。幕末までに2000種以上の謡本が刊行されました。その約8割は観世流謡本です。

「観世流謡曲集」は江戸時代の版元書肆である山本長兵衛により出版されたものです。「観世流改

訂謡本」は、明治 40(1907)年に丸岡桂が旧来の謡本の章句・節付の不備と訛誤に気付き、観世流謡本の是正を目的として刊行したもので、従来の謡本を一新しました。

【坂元雪鳥】

明治 12(1879)年、福岡県に生まれる。本名三郎。明治 40(1907)年に東京大学文学部国文学科を卒業の後、熊本の旧制第五高校以来の恩師である夏目漱石の紹介で東京朝日新聞社に入社しました。翌々年に同社を退職し、中学教諭を経て日本大学文学部の教授、法政大学・東京女子大学などの講師を歴任します。また、大学時代から能評を執筆しており、朝日新聞社時代から長きにわたり天邪鬼の筆名で同紙の能評欄を担当しました。従来の主觀性を重視する批評から芸術批評に昇華させた近代能評を確立し、本格的な能評の分野を開拓した功績は大きいといわれています。

『謡稽古の心得』は能楽の実技書として、志す人への心構えのほか、発声、型などの技術的なこと、能の流派や使用される用語の詳細などが記されています。

2. 浄瑠璃

| 作品リスト No.21-23 |

『全盛 操 花草』^{ぜんせいみさおのはなぐるま}は浄瑠璃の一派である富本節の曲名で、処世並木五瓶の作詞、名見崎喜惣治の作曲。通称「木遣」ともいわれ、文化元(1804)年9月に江戸・市村座の「吉原俄番附」^{よしわらにわかのばんづけ}の大詰に初演されました。演奏は二世富本豊前太夫・富本大和太夫、三味線を名見崎喜惣治・名見崎市十郎が出語り^{※7}でつとめました。吉原で毎年8月に催される祭礼で芸者が手古舞^{てこまい}^{※8}姿で木遣をうたう情景を描いた作品です。

浄瑠璃は語り物芸能の一つで、三河国で好評だった牛若丸と浄瑠璃姫の恋物語である「浄瑠璃姫物語」を起源とし、その始まりは室町時代末期にさかのぼります。平曲^{※9}や謡曲の流れを組んだ新しい語り物が発生し、はじめは琵琶法師が琵琶の伴奏で節をつけて語っていたものが、後に伝來した三味線が使われるようになったことにより音楽性が豊かなものに変化し、さらに江戸時代に人形芝居と結びついて人形浄瑠璃が成立しました。

江戸時代になると、大阪で語り手の竹本義太夫が義太夫節を完成させ、作家の近松門左衛門らの文学性の高い脚本とともに浄瑠璃を発展させました。江戸に伝わった浄瑠璃は歌舞伎の音楽やお座敷の音楽として河東節、常磐津節、富本節など多くの流派に分かれます。義太夫節が上方浄瑠璃と呼ばれるのに対して江戸で生まれた流派は江戸浄瑠璃と呼ばれます。

- ※7 出語り：淨瑠璃の演奏者が舞台に登場して語ること。
- ※8 手古舞：江戸の祭礼の時に山車の露払いとして木遣を歌って練り歩いた者のこと。
- ※9 平曲：琵琶の伴奏で平家物語を語る語り物。

【近松門左衛門】

淨瑠璃・歌舞伎狂言作者である近松門左衛門は、天和3(1683)年に「世繼曾我」を発表して人気となり、その後竹本義太夫と組んで「出世景清」を書き、その地位を固めました。その後「曾根崎心中」が上演され、江戸時代の町人社会の生活や出来事を題材にした、世話淨瑠璃という新しい分野を開きました。「女殺油地獄」や「心中天網島」など、100を超える作品のうち、世話物は24編を数えます。江戸時代最高の劇作家として知られる近松門左衛門の演劇観は「芸術は虚構と事実との微妙な間にあるもの」とする「虚実皮膜論」であり、日本文芸史における虚構論の先駆とされています。

展示している『傑作百段淨瑠璃注釈』は山本信吉による淨瑠璃の解説書です。『近松世話淨瑠璃詳解』は高野辰之が明治40(1907)年に記した近松門左衛門の世話淨瑠璃作品についての解説書です。

3. 群馬のうた

| 作品リスト No.24-25 |

人々の生活の中で生まれた民謡は、口伝えで長い間歌い継がれてきました。群馬の風土に育まれて伝承されてきた民謡は、田植えや、木挽き、糸とり（座繰り）などの労働の歌から馬子唄などの運搬に関する歌、盆踊りや祭りの歌などが多く残されています。

その中でも、群馬の代表的な民謡として糸引き歌、機織り歌が挙げられます。糸を引いたり機を織りながら歌うことで仕事の能率向上の役割があったようです。上毛三山に囲まれた立地で山越えの交通手段は馬であったことから、馬子唄や追分が歌われており、碓氷、片品、嬬恋、赤城など各地の地名が付けられた馬子唄が残されています。赤城馬子唄は赤城山の沼に張った氷を切り、この天然氷を馬の背に付けて沼田や高崎に運んだ馬方衆が歌ったといわれています。

古くから歌い継がれてきた民謡は作詞者や作曲者が不明であることが多いのに対して、大正から昭和初期にかけて特定の地域のために歌ったり踊ったりできる新民謡といわれる歌も創作されました。この新民謡に携わったとされるのが野口雨情、北原白秋、西條八十、林柳波、中山晋平、藤井清水などです。「上州小唄」の作詞は野口雨情、作曲は中山晋平です。

【佐藤惣之助】

詩人。1890(明治 23)年、神奈川県川崎市生まれ。15 歳の頃、作家である佐藤紅緑に師事し、千家元麿とも交流を始めます。23 歳の時に高村光太郎や福士幸次郎らと詩誌『テラコッタ』を創刊して詩の世界に入りました。大正 4 (1915) 年には処女詩集である「正義の兜」を出版、「狂へる歌」「嵐」など次々と詩集を刊行し、生涯で 22 冊の詩集を残しています。最初は「白樺」の人間主義でしたが、やがて多様な色彩感覚を持つ生命感あふれる詩を形成し、晩年は戦争や時局に沿った詩を書きました。大正 14(1925) 年には詩誌『詩の家』を創刊し、群馬から清水房之丞、岡田刀水士らが同人として加わっています。

昭和 8 (1933) 年に花枝夫人を失った後、しばらくして萩原朔太郎の妹の愛子と結婚します。愛子の故郷である群馬へ足を運ぶことが多く、赤城大沼や榛名湖で好きな釣りをすることもあり、「榛名の氷魚」や「赤城の姫鱒」など釣りに関する随筆も書いています。

民謡や歌謡曲の作詞も手掛けており、映画『浅太郎赤城の唄』の主題歌である「赤城の子守唄」を作詞し、「男の純情」「湖畔の宿」など数々の流行歌を残しました。また、阪神タイガースの応援歌でもある「六甲おろし」も作詞しています。佐藤は昭和 17(1942) 年、義兄である萩原朔太郎の死去からわずか 4 日後、脳溢血のため後を追うように 53 歳で亡くなりました。

参考文献

- 『百科事典の歴史』 平凡社／編 平凡社 1964年
- 『辞典・事典の歴史 杉本つとむ日本語講座3』 杉本つとむ／著 桜楓社 1979年
- 『伊香保誌』 伊香保町教育委員会／編 1970年
- 『江戸音曲事典』 小野武雄／編著 展望社 1979年
- 『群馬県史 資料編27』 群馬県史編さん委員会／編 1980年
- 『群馬県人名大事典』 上毛新聞社／編 1982年
- 『前橋事典』 前橋事典編集委員会／編 国書刊行会 1984年
- 『邦楽百科辞典』 吉川英史／監修 音楽之友社 1984年
- 『近代庶民生活誌 3』 南博／編集代表 三一書房 1985年
- 『日本音楽大事典』 平凡社 1989年
- 『日本史大事典』 平凡社 1993年
- 『日本奇談逸話伝説大事典』 志村有弘／編 勉誠社 1994年
- 『日本大百科全書』 小学館 1994年
- 『群馬の作家たち』 土屋文明記念文学館／編 塙書房 1998年
- 『田口卯吉』 田口親／著 吉川弘文館 2000年
- 『日本国語大辞典』 小学館国語辞典編集部／編 小学館 2001年
- 『よくわかる日本音楽基礎講座』 福井昭史／著 音楽之友社 2006年
- 『能・狂言事典』 西野春雄・羽田昶／編 平凡社 2011年
- 『日本民謡事典』 長田 晓二／編 全音楽譜出版社 2012年
- 『能楽大事典』 小林貴／著 筑摩書房 2012年
- 『小泉八雲集』 小泉八雲／著 新潮社 2012年
- 『古地図で巡る江戸の怪談』 双葉社 2014年
- 『「言海」を読む』 今野真二／著 角川書店 2014年
- 『日本の面影』 池田雅之／著 NHK出版 2016年
- 『日本の伝統芸能』 日外アソシエーツ株式会社／編 日外アソシエーツ 2017年
- 『総合百科事典ポプラディア』 ポプラ社 2021年
- 『図説日本の辞書100冊』 沖森卓也／編 武蔵野書院 2023年